

体育科模擬授業の効果的な実施方法に関する検討

An examination of effective methods for trial teaching in physical education class

藤 田 育 郎, 池 田 延 行

Ikuro FUJITA and Nobuyuki IKEDA

1. は じ め に

近年、我が国では、「教職実践演習」の新設・必修化、教育実習の改善・充実、教員養成の期間延長など、採用時における教員の質的保証に向けた方策が検討されている。中央教育審議会¹⁾の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、養成段階において教員としての資質能力を確実に保証するための方策を検討する必要性を指摘されている。加えて、「いつの時代にも求められる資質能力」として、「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等」を挙げている。今日、教員養成・採用の場においてキーワードになっている実践的指導力を育成する取り組みとして、大学の教員養成カリキュラムでは、模擬授業が積極的に展開されている。全国の体育系の教員養成大学・学部63校を対象に実態調査を行った三木ほか²⁾は、模擬授業を実施している大学・学部は全体の約3割に当たる19校であったことを報告しており、体育教師教育の領域においても、模擬授業という取り組みが広がり始めてきたといえる。

それに伴い、模擬授業の成果について言及した研究も数多く報告されてきたが、各大学において実施されている模擬授業は、模擬授業を実施することのねらい、模擬授業を開講している時期、模擬授業を実施する際の人数、時間、運営方法、模擬授業後の反省会の内容やフィードバックの内容等も様々である。これは、受講者数や受講者の実態、教育実習や他の授業科目との兼ね合い等によるためだと考えられ、模擬授業は、各大学の実情に即した方法および内容で展開されるべきだと考えられる。

本研究では、体育科模擬授業を受講した学生に対して実施したアンケート調査から、より効果的な模擬授業の実施方法を検討することを目的とした。

2. 方 法

2-1. 模擬授業の概要

2010年度秋期に、本学体育学部こどもスポーツ教育学科3年生を対象に開講された「保健体育科教育法Ⅱ」では、「授業の計画、実践、分析・評価を通して、授業づくりの視点を理解すること」をねらいとした模擬授業が実施された。「保

表1 「保健体育科教育法Ⅱ」の授業展開

回	授 業 内 容
1	オリエンテーション
2	指導案作成と教材づくり①（グループ活動）
3	指導案作成と教材づくり②（グループ活動）
4	指導案作成と教材づくり③（グループ活動）
5	模擬授業① Aグループ: 体づくり運動(多様な動きをつくる運動)、Bグループ: 陸上運動(走り高跳び)
6	模擬授業①の振り返り
7	指導案作成と教材づくり④（グループ活動）
8	模擬授業② Aグループ: 器械運動(跳び箱運動)、Bグループ: 体づくり運動(Gボールを用いた運動)
9	模擬授業②の振り返り
10	指導案作成と教材づくり⑤（グループ活動）
11	模擬授業③ Aグループ: ボール運動(アルティメット)、Bグループ: ボール運動(ハンドベースボール)
12	模擬授業③の振り返り
13	模擬授業で取り上げた内容に関する実技
14	模擬授業の総括（アンケートの実施）
15	まとめ

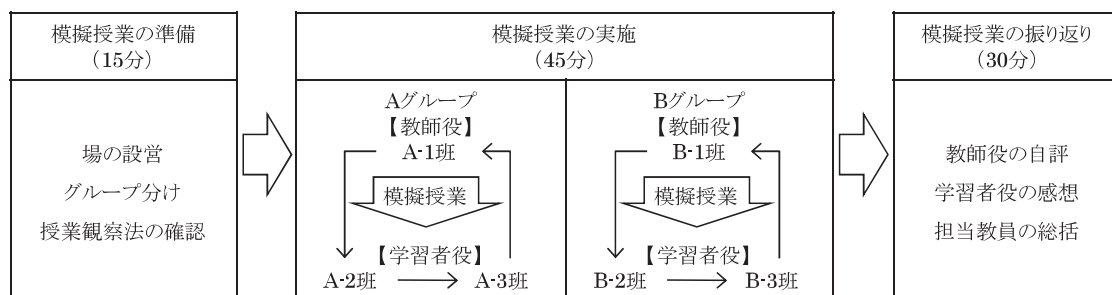


図1 模擬授業実施時の授業の流れ

「保健体育科教育法Ⅱ」の授業展開は、表1に示したとおりである。

2-2. 模擬授業の実施方法

約100名の受講生を2グループに分け、さらに模擬授業を担当する3つの班（1班：約16名）に分けた。模擬授業実施時の授業の流れは図1に示したとおりであり、はじめの約15分間で授業準備（場の設営や学習者役のグループ分け等）を行い、両グループが45分間の模擬授業を並行して実施した。その後、残りの約30分間で模擬授

業の振り返りを行った。

教師役は、各班から3名を選出し、T1がメインの授業者、T2およびT3はT1の補助者として模擬授業を進行した。模擬授業終了後の振り返りは、教師役による自評、授業を受けた学習者役の感想、授業担当教員による総括、という内容であった。また、模擬授業を実施した翌週の振り返りでは、後述する4項目のデータを教師役班に集計・提示させ、それに基づいて各班で検討した授業改善の方略を、受講生全員で共有することが目的とされた。

表2 アンケートの集計結果

No.	質 問 項 目	M	(S.D.)
1	指導案作成や教材づくりについての事前学習は十分だった	2.72	(0.70)
2	指導案作成や教材づくりの準備時間は十分だった	2.63	(0.83)
3	掲示資料や学習カードなども作成したほうがよい	3.43	(0.64)
4	実際に実技を行って、試しながら指導案作成や教材づくりをしたほうがよい	3.40	(0.70)
5	単元計画を作成し、どのような学習をしてきて、どのような学習に発展していくか ということを明確にした上で、1単位時間の模擬授業を実施したほうがよい	3.30	(0.61)
6	実際に授業を体験することは、授業の基礎的条件(例:運動時間の確保、 子どもの管理、授業規律の維持、授業の雰囲気など)を理解するのに効果的だった	3.67	(0.54)
7	実際に授業を体験することは、授業の内容的条件(例:目標と内容の整合性、 教材や学習課題の適切さなど)を理解するのに効果的だった	3.42	(0.67)
8	教師役を経験できる人数や回数をもっと多くしたほうがよい	3.50	(0.60)
9	生徒役の人数を少なくし、小グループの指導を同時に複数の場所で行うほうがよい	2.66	(0.82)
10	1授業(45分)を行うのではなく、授業の各場面(説明、運動指導、まとめなど)を 抽出して行うほうがよい	2.21	(0.88)
11	「期間記録法」による振り返りは効果的だった	3.29	(0.81)
12	「授業評価法(形成的評価、観察者チェックリスト)」による振り返りは効果的だった	3.32	(0.67)
13	「パフォーマンステスト」による振り返りは効果的だった	3.03	(0.77)
14	小グループで議論し、意見を共有する振り返りは効果的だった	3.34	(0.71)
15	反省会の内容をもとに授業をつくり直して、再度実践する機会を設けたほうがよい	3.00	(0.69)
16	今回実施した模擬授業は効果的だった	3.42	(0.65)

2-3. 模擬授業の振り返り

下記の4項目についてデータを集計し、翌週に模擬授業を振り返る際の手がかりとした。

- ①期間記録法⁵⁾(授業の時間配分の記録)
- ②形成的授業評価法³⁾(学習者による授業評価)
- ③観察者チェックリスト⁴⁾(観察者による授業評価)
- ④パフォーマンステスト^{注1)}(観察者による学習者の技能評価)

2-4. アンケート調査と分析方法

アンケート調査は14回目の授業で実施し、欠席者を除く90名から回答を得た。アンケートは、模擬授業の効果及び改善点を問う全16項目で作成し、4件法(4:そう思う、3:少しそう思う、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)で回答させた。質問項目1～5は授業づくりの段階、

質問項目6～10は授業実施の段階、質問項目11～15は授業の振り返りの段階、質問項目16は模擬授業の全体的な効果について問うものであった(アンケート項目については、表2参照)。また、回収したアンケートについて、Microsoft Excelを用いて単純集計を行った。

3. 結果と考察

1) 模擬授業の全体的な効果

表2は、アンケートの集計結果を示したものである。模擬授業の全体的な効果を問う「16. 今回実施した模擬授業は効果的だった」については、3.42と比較的高い数値を示した。したがって、多くの受講生が今回実施した模擬授業の効果について、肯定的に捉えていることが伺える。

2) 模擬授業の具体的な効果と改善点

他の項目に比べて高い値を示した項目として、「6. 実際に授業を体験することは、授業の基礎的条件（運動時間の確保、子どもの管理、授業規律の維持、授業の雰囲気など）を理解するのに効果的だった」（3.67）と「7. 実際に授業を体験することは、授業の内容的条件（目標と内容の整合性、教材や学習課題の適切さなど）を理解するのに効果的だった」（3.42）が挙げられる。これは、実際に自分たちで計画・作成した授業を教師役として実施したり、学習者役として体験したりすることを通して、体育授業の具体的なイメージを形成することができたものと考えられる。

授業の振り返りの段階について問う項目の中では、「11. 期間記録法による振り返りは効果的だった」（3.29）、「12. 授業評価法（形成的評価、観察者チェックリスト）による振り返りは効果的だった」（3.32）、「14. 小グループで議論し、意見を共有する振り返りは効果的だった」（3.34）、以上3項目において高い値を示した。したがって、受講生は、観察・評価データを手がかりにして授業づくりの視点を学ぶという今回実施した模擬授業のねらいに迫ることができたものと考えられる。一方、「13. パフォーマンステストによる振り返りは効果的だった」（3.03）は、他の3項目に比べて低い値を示した。この原因は、授業づくりの段階において、教師役班の多くがパフォーマンステストの作成に悩む様子がみられたことから推察できる。つまり、受講者の多くは、体育授業において子どもたちの技能向上を意図した教材や学習課題を提供することの重要性は理解できているが、学習者の技能を評価する視点を十分に把握していなかったためであると考えられる。よって、学習者の技能を具体的に評価する手立てを授業づくりの段階で講ずる必要があると考えられる。

また、他の項目に比べて低い値を示した項目として、「1. 指導案作成や教材づくりについての事前学習は十分だった」（2.72）と「2. 指導案作成や教材づくりの準備時間は十分だった」（2.63）

が挙げられる。指導案作成と教材づくりの時間を計5時間設けたが、ほぼ初めて体育の授業づくりに臨む受講者が一から授業づくりを行うには、より十分な時間と情報を提供しなければならないといえる。また、「3. 掲示資料や学習カードなども作成したほうがよい」（3.43）、「4. 実際に実技を行って、試しながら指導案作成や教材づくりをしたほうがよい」（3.40）、「5. 単元計画を作成し、どのような学習をしてきて、どのような学習に発展していくかということを明確にした上で、1単位時間の模擬授業を実施したほうがよい」（3.30）といった授業づくりの段階に対して改善を求める受講生が多く、授業づくりの段階において、より有益な内容を提供することが今後の課題であるといえる。同時に、「8. 教師役を経験できる人数や回数をもっと多くしたほうがよい」（3.50）と捉える受講生も多くみられ、おおよそ100名の受講生に対して、より多くの指導経験を保証する運営方法を検討することが今後の課題であるといえる。

4. ま と め

本研究では、体育科模擬授業を受講した学生に対して実施したアンケート調査から、より効果的な模擬授業の実施方法を検討することを目的とした。その結果、実施した模擬授業の効果及び改善点として以下の点が挙げられる。

- 1) 模擬授業の全体的な効果を問う質問項目については、比較的高い数値を示した。したがって、受講生は今回実施した模擬授業の効果について、肯定的に捉えていることが伺える。
- 2) 自分たちで計画・作成した授業を教師役として実施したり、学習者役として体験したりすることを通して、体育授業の具体的なイメージを形成することができたものと考えられる。
- 3) 観察・評価データを手がかりにして授業づくりの視点を学ぶという今回実施した模擬授業

のねらいに受講生は迫ることができたものと考えられる。しかし、パフォーマンステストによる振り返りは十分な成果を保証できなかったと考えられ、学習者の技能を具体的に評価する手立てを講ずる必要があるといえる。

- 4) 授業づくりの段階に対する受講者のニーズが特に高く、模擬授業の指導案作成と教材づくりに十分な時間を充てる必要があることに加え、それらにかかわる情報を模擬授業の事前学習として十分に提供する必要がある。また、より多くの学生に指導経験を保証する運営方法を検討することが今後の課題であるといえる。

5. 謝 辞

本研究におけるアンケートにご協力いただいた2010年度「保健体育科教育法Ⅱ」受講生の皆さんに深く感謝いたします。なお、本研究は2010年度国士舘大学体育学部附属体育研究所の研究助成によって行われた。

注

- 注1) 学習者の技能達成度を評価するための尺度や評価基準をパフォーマンステストとして、教師役班が独自に作成した。例えば、跳び箱運動担当の教師役班は、助走、踏切、着手、着地といった局面ごとの動作評価基準を作成した。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）。
- 2) 三木ひろみ・長谷川悦示・高橋健夫（2004）わが国の教師養成の現状と課題。大学・大学院における体育教師教育カリキュラム及び指導法に関する研究。研究代表者 高橋健夫。平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書：pp.50-58。
- 3) 高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝夫（2003）体育授業を形成的に評価する。高橋健夫編 体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント－。明和出版：東京，pp.12-15。
- 4) 高橋健夫・日野克博（2003）観察者が体育授業を主観的に評価する。高橋健夫編 体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント－。明和出版：東京，pp.31-34。
- 5) 高橋健夫・吉野聡（2003）体育授業場面を観察記録する。高橋健夫編 体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント－。明和出版：東京，pp.36-39。